

合

九月十五日

一王造移方...
...
...

一全...

一...

一...

一...

...

...

...

...

...

...

九月

[illegible]

一、此亦不爲奇事。人之所爲，物之爲，亦各有其理。人之所爲，亦各有其理。人之所爲，亦各有其理。

りる。この山をわたりて久米の麓に至る。此所は
 石の山なり。石を〇三町人より去るハ山麓に到
 り。本公事所の麓に到る。此所は石の山なり。石を
 久米の麓に到る。此所は石の山なり。石を〇三町人より去るハ山麓に到
 り。本公事所の麓に到る。此所は石の山なり。石を

同方日

一、御膳上御共にお膳展奉りて、石を
 山等の所より取りて、お膳に
 一、御膳上御共にお膳展奉りて、石を
 山等の所より取りて、お膳に
 一、御膳上御共にお膳展奉りて、石を
 山等の所より取りて、お膳に

二 松山青 每入 常服 戒 年 秋 冬

同方曰復時

一、事多誤方以行也。予嘗於此指其失而
坊之。中杜屏休亦曰：「陳公事已盡，而公亦
上之者，乃以行。」且曰：「固之矣，作乎？」
予曰：「在公，乃以行。」曰：「何故？」又曰：「按公三可
人，以用白之，未幾？」

[illegible][illegible]

一、此書係在... 號物之... 原係自...
 二、此書係在... 號物之... 原係自...

5

八

九月十五日

[illegible]

同方亭

[illegible]

以海軍之新法以統一海軍之權之為事也
 於此以海軍之新法以統一海軍之權之為事也
 於此以海軍之新法以統一海軍之權之為事也
 於此以海軍之新法以統一海軍之權之為事也

山城成公に在りて之を以て中り
 之を以て之を以て之を以て之を以て
 定例に之を以て之を以て之を以て

[illegible][illegible]

之乃當其狀也

江戶生不中 寺 書 望 望 何 者 也 入

一、多門分列云云

一古浪山

一、おきやうしりふくは、定しき

少壯一打白勝

汝王平公在任所時

以管戶使以并分乘个的口中乘乘

井上國志、下而爲臣又戸部事りたり

才

方士
 上之三
 易
 九月廿七日

時、望遠を以て其の意を以て、其の意を以て

昇平富貴を以て終るを為す哉

永年堂

學之於人其功亦大矣

卷之五

此詩乃蘇軾所作

下御在焉

一 主事官の呈する世系図の事
此の世系図は、
一

一 主事官の呈する世系図の事
此の世系図は、
一

一 主事官の呈する世系図の事
此の世系図は、
一

一 主事官の呈する世系図の事
此の世系図は、
一

一 主事官の呈する世系図の事
此の世系図は、
一

一 主事官の呈する世系図の事
此の世系図は、
一

一 主事官の呈する世系図の事
此の世系図は、
一

一 主事官の呈する世系図の事
此の世系図は、
一

一 主事官の呈する世系図の事
此の世系図は、
一

一 主事官の呈する世系図の事
此の世系図は、
一

一 主事官の呈する世系図の事
此の世系図は、
一

一 主事官の呈する世系図の事
此の世系図は、
一

手印一しちのねまのうきからたて

おれ下り物おし

白く列は

一人とあうと

一

ふりかへてはるのねまのうきから

八月十八日

一 おれまのねまのうきからたて

一人とあうと

白く列は

おれ下り物おし

ふりかへてはるのねまのうきから

おれまのねまのうきからたて

一人とあうと

白く列は

一 おれまのねまのうきからたて

おれ下り物おし

ふりかへてはるのねまのうきから

一 おれまのねまのうきからたて

おれ下り物おし

ふりかへてはるのねまのうきから

八月十八日

一 おれまのねまのうきからたて

おれ下り物おし

ふりかへてはるのねまのうきから

一 おれまのねまのうきからたて

おれ下り物おし

ふりかへてはるのねまのうきから

八月十八日

一 おれまのねまのうきからたて

おれ下り物おし

一 寺の境内に人々を奉りてありきと云ふ事
 是より又古所より八木庵にありて西の門に
 ありては、此の寺の境内にありてより此の寺に
 ありては

一 寺の境内にありては、此の寺の境内にありては

十月二日 晴

一 寺の境内にありては、此の寺の境内にありては
 寺の境内にありては、此の寺の境内にありては
 寺の境内にありては、此の寺の境内にありては

一 寺の境内にありては、此の寺の境内にありては
 寺の境内にありては、此の寺の境内にありては

一 寺の境内にありては、此の寺の境内にありては

一人と云ふ
 二人と云ふ
 一人と云ふ

同日晴

一 寺の境内にありては、此の寺の境内にありては

一 寺の境内にありては、此の寺の境内にありては

一 寺の境内にありては、此の寺の境内にありては
 寺の境内にありては、此の寺の境内にありては

一 寺の境内にありては、此の寺の境内にありては

一 寺の境内にありては、此の寺の境内にありては

[illegible]

其下、予も亦少く事は成り、又与松原
山左之廣に在りて、未だ終焉を了せず
終焉と云ふ處去らざる

子年四月廿三日
 子年四月廿三日

古風之哀而

延享四年九月廿八亥十二月文化十石至十二月

心通玄妙

十月八日 初亥 丙戌

十月八日 初亥 西風

以華山定心者保之固
 以仙定心者保之固

大正三年四月廿五日

修善甘芳早能成器之原主勸

今宜服素衣素帶劍下卿亦乃臣

李廣公集序

王以修先生

以能知者
以知能者

即此後建康故都亦因之盛

此乃在... 宣...

本著より、
「素朴なる心」

張子正一の張蘇の足下、今、自、江、南、歸、來、の、り、矣、人、

一、立心以正氣
一、立心以正氣

此乃其女也

此山在玉衡山南

同平甚

同九日

苦盡甘來之正候也

卷之五

卷之五

一 王様御座る所へは
 由木より御座る所へは
 而利より御座る所へは
 山王より御座る所へは
 而利より御座る所へは
 山王より御座る所へは
 而利より御座る所へは
 山王より御座る所へは
 而利より御座る所へは

四十一日

一 王様御座る所へは
 由木より御座る所へは
 而利より御座る所へは
 山王より御座る所へは
 而利より御座る所へは
 山王より御座る所へは
 而利より御座る所へは
 山王より御座る所へは
 而利より御座る所へは

四十二日

一 王様御座る所へは
 由木より御座る所へは
 而利より御座る所へは
 山王より御座る所へは
 而利より御座る所へは
 山王より御座る所へは
 而利より御座る所へは
 山王より御座る所へは
 而利より御座る所へは

四十三日

一 王様御座る所へは
 由木より御座る所へは
 而利より御座る所へは
 山王より御座る所へは
 而利より御座る所へは
 山王より御座る所へは
 而利より御座る所へは
 山王より御座る所へは
 而利より御座る所へは

十月十日

一、以科學定例，以道德定序。

一 學士軍時より兵に
仰せ令へり力盡

江多分少袖ニウ着候も是不便候事

同方日惟風

本後世為新

十月十五

中村の如電步切、席科を承をたを八

一、學問之理不可不明

國子監
冬立

少壯何足升，老病不足憂。

竹

[illegible]

江戸幕府 文政 御用
御用 御用

江戸幕府 文政 御用
御用 御用

江戸幕府 文政 御用
御用 御用

江戸幕府 文政 御用
御用 御用

江戸幕府 文政 御用
御用 御用

江戸幕府 文政 御用

江戸幕府 文政 御用
御用 御用

江戸幕府 文政 御用
御用 御用

江戸幕府 文政 御用
御用 御用

江戸幕府 文政 御用

江戸幕府 文政 御用
御用 御用

江戸幕府 文政 御用
御用 御用

一 此は乃ち其の故に在り

一 此は乃ち其の故に在り

一 此は乃ち其の故に在り

一 此は乃ち其の故に在り

一 此は乃ち其の故に在り

一 此は乃ち其の故に在り

一 此は乃ち其の故に在り

此は乃ち其の故に在り

同十九日

一 此は乃ち其の故に在り

一 此は乃ち其の故に在り

一 此は乃ち其の故に在り

一 此は乃ち其の故に在り

此は乃ち其の故に在り

一 此は乃ち其の故に在り

一 此は乃ち其の故に在り

一 此は乃ち其の故に在り

一 此は乃ち其の故に在り

此は乃ち其の故に在り

一 此は乃ち其の故に在り

一 此は乃ち其の故に在り

一 此は乃ち其の故に在り

一 此は乃ち其の故に在り

一 此は乃ち其の故に在り

一 此は乃ち其の故に在り

一 此は乃ち其の故に在り

一 此は乃ち其の故に在り

十月廿日

一 此は乃ち其の故に在り

一 此は乃ち其の故に在り

一 此は乃ち其の故に在り

一 此は乃ち其の故に在り

一 此は乃ち其の故に在り

一 此は乃ち其の故に在り

此は乃ち其の故に在り

一 此は乃ち其の故に在り

あやうらふいふ物もほつていふまゝに
いふまゝにいふまゝに

いふまゝにいふまゝにいふまゝに
いふまゝにいふまゝにいふまゝに

いふまゝにいふまゝにいふまゝに
いふまゝにいふまゝにいふまゝに

いふまゝにいふまゝにいふまゝに
いふまゝにいふまゝにいふまゝに

いふまゝにいふまゝにいふまゝに
いふまゝにいふまゝにいふまゝに

いふまゝにいふまゝにいふまゝに
いふまゝにいふまゝにいふまゝに

いふまゝにいふまゝにいふまゝに
いふまゝにいふまゝにいふまゝに

いふまゝにいふまゝにいふまゝに
いふまゝにいふまゝにいふまゝに

いふまゝにいふまゝにいふまゝに

いふまゝにいふまゝにいふまゝに
いふまゝにいふまゝにいふまゝに
いふまゝにいふまゝにいふまゝに
いふまゝにいふまゝにいふまゝに

十月一日

いふまゝにいふまゝにいふまゝに
いふまゝにいふまゝにいふまゝに
いふまゝにいふまゝにいふまゝに
いふまゝにいふまゝにいふまゝに
いふまゝにいふまゝにいふまゝに
いふまゝにいふまゝにいふまゝに

九月廿二日

十月廿二日

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

一、

二、

三、

四、

五、

六、

七、

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

十一月廿四日

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

一、

二、

三、

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

一、

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

一、

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

一、

十月革命

一、松陰先生

心居物之國其在吾

当月及至九月十五日

卷之五

天竺僧人曰：師尊，心之無相，

一、此等不可思議之事，固非

金華月夜記

此乃家傳秘法

王右軍書

此乃其子也

附出本局女學一學部

一、

山重水复疑无路

此書中なる所法よく悉くの事を知し

此乃門之安於此也

之聲五音下五音也五音記五音之五音分五音也五音

文平予之乃くや云

健公
此中大有佳處
吾友方在東山
其人也

同日午時全風雷雨

卷二 風化

定任王守志為鳳城縣知縣

任事如歸而心不為所動也

文子長壽寺記

二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。

二、以爲豆豉系腐敗食品上感生石硫

市九里一書 修近たふうそり

[illegible]

此乃在東山之上也

以有公而無私之理。古者之有公也。以

一、此乃

阿含や金剛經の經已、各有名經

たゞ今を去るに足る

り、ハミ黒石、ハミ西代、ハミ久と、ハミ五石

壽安侯吳氏之印

以頤之山脈爲界而分其地

今更上
三ノ下

小梅軍志

是月先月之月也

十月之月

ち新陳代謝を促すのに役立つ。

テ細く書き

夢龍及王世貞

洲より西へ至るは、今も江戸の如く、

己未年

少峰初年與王元吉之小婿善其子元吉亦自號少峰

案入札身並事九月五日

朱熹先生文集卷之四十五

張之江先生題

八十八

上月四日

同日四日

一 金銀の取引が盛んになり、金銀の相場が暴落した。
一 金銀の取引が盛んになり、金銀の相場が暴落した。
一 金銀の取引が盛んになり、金銀の相場が暴落した。

同日四日

一 金銀の取引が盛んになり、金銀の相場が暴落した。
一 金銀の取引が盛んになり、金銀の相場が暴落した。
一 金銀の取引が盛んになり、金銀の相場が暴落した。
一 金銀の取引が盛んになり、金銀の相場が暴落した。
一 金銀の取引が盛んになり、金銀の相場が暴落した。

上月七日

一 金銀の取引が盛んになり、金銀の相場が暴落した。
一 金銀の取引が盛んになり、金銀の相場が暴落した。
一 金銀の取引が盛んになり、金銀の相場が暴落した。
一 金銀の取引が盛んになり、金銀の相場が暴落した。
一 金銀の取引が盛んになり、金銀の相場が暴落した。

同日八日

一 金銀の取引が盛んになり、金銀の相場が暴落した。
一 金銀の取引が盛んになり、金銀の相場が暴落した。
一 金銀の取引が盛んになり、金銀の相場が暴落した。
一 金銀の取引が盛んになり、金銀の相場が暴落した。
一 金銀の取引が盛んになり、金銀の相場が暴落した。

一 江戸より分るに江戸の事などいふに四月廿

一 江戸より分るに江戸の事などいふに四月廿

一 江戸より分るに江戸の事などいふに四月廿

一 江戸より分るに江戸の事などいふに四月廿

一 江戸より分るに江戸の事などいふに四月廿

同十九日 風止

一 江戸より分るに江戸の事などいふに四月廿

一 江戸より分るに江戸の事などいふに四月廿

一 江戸より分るに江戸の事などいふに四月廿

二月廿一日 晴

一 江戸より分るに江戸の事などいふに四月廿

二月廿二日 晴

一 江戸より分るに江戸の事などいふに四月廿

[illegible][illegible]

土月布三日

[illegible]

工事を自費でやる事と、主として金を出して
 貸す事と、二つに分けて、二つの事業として
 行ふ方が、便当なり。

沙
名
經
王

卷之四

此書月以爲名不爲己矣蓋此書是悅樂
 例之也此書初以悅樂之字法月而中亦
 以書之悅樂水以書悅樂人三句之悅樂
 此書之悅樂

とて大光内照を以て
最良の道と爲すべし
とて以て之を以て

陽子と陽子
と陽子と陽子

[illegible]

[illegible]

土月廿四日晴風

[illegible]

同本五日照大衆

同本志目

[illegible]

同市古

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

一 金をたぐり ちんちん
 一 金をたぐり ちんちん
 一 金をたぐり ちんちん
 一 金をたぐり ちんちん

一 ちんちん ちんちん ちんちん
 一 ちんちん ちんちん ちんちん
 一 ちんちん ちんちん ちんちん
 一 ちんちん ちんちん ちんちん

土月市

一 ちんちん ちんちん ちんちん
 一 ちんちん ちんちん ちんちん

一 ちんちん ちんちん ちんちん
 一 ちんちん ちんちん ちんちん
 一 ちんちん ちんちん ちんちん
 一 ちんちん ちんちん ちんちん

一 ちんちん ちんちん ちんちん
 一 ちんちん ちんちん ちんちん
 一 ちんちん ちんちん ちんちん
 一 ちんちん ちんちん ちんちん

乙未年

卷之六

極之

心齋

年六

孝

七

東之石室

火器

卷下

此乃古之所謂

一、平山、平山、平山

芳

次之

卷之六

九

采石野史

蘇軾

此等文章

第百一十卷


器用なる

竹竿

五板のちて

少也。三子也。

40



100

十二月

一、
二、

齊

我乃不

7

何

今更

美石集

日

[illegible]

國名要略

一、以疾地中而為之，其金而內，則其

[illegible]

太山學公

一、山、水、石、木、花、鳥、蟲、魚、人、物、各得其宜、

一、李慶地、苗山、安家、李家、李家、李家

[illegible]

同日大和歌

[illegible]

一 需休休矣 之需与外 觀子內之 之需人

一 諸君を以て其の志を成さんと欲するは
一 志を成さんと欲するは其の志を成さんと欲するは

三月五日

一 今朝の朝早くから雨の降る所ありて入河を
二 今朝の朝早くから雨の降る所ありて入河を

三月六日 三月

一 今朝の朝早くから雨の降る所ありて入河を
二 今朝の朝早くから雨の降る所ありて入河を

三月七日

一 今朝の朝早くから雨の降る所ありて入河を
二 今朝の朝早くから雨の降る所ありて入河を

一 今朝の朝早くから雨の降る所ありて入河を
二 今朝の朝早くから雨の降る所ありて入河を

一 今朝の朝早くから雨の降る所ありて入河を
二 今朝の朝早くから雨の降る所ありて入河を

一 今朝の朝早くから雨の降る所ありて入河を
二 今朝の朝早くから雨の降る所ありて入河を

三月八日

三月九日

三月十日

三月十一日

三月十二日

一 今朝の朝早くから雨の降る所ありて入河を
二 今朝の朝早くから雨の降る所ありて入河を

一 今朝の朝早くから雨の降る所ありて入河を
二 今朝の朝早くから雨の降る所ありて入河を

心在物外身在中
心在物外身在中

山如千仞高，水如萬仞深。空谷傳
清響，幽林散夕陰。松蘿垂石壁，
苔蘚滿苔岑。泉聲流石上，雲色
散松陰。空谷傳清響，幽林散夕
陰。

理奉事之有司也。例之於人。人
 之有司也。例之於人。人之有司也。

口乃天下之命也。此道至要。

山陰之石室也。其地多石。故曰石室。

有條の空を飛ぶ下上は、
 心で通う。

此書為元版子何常為也

あつたての海にたふさぐ

心もろくもつてはなすこと

御之

七

卷

馬

馬中興

市本

御鑑

御
計

馬至如

清波

御平

即成

即成

即成

即成

即成

即成

即成

即成

即成

即成

即成

即成

即成

即成

即成

即成

即成

一可人第

少子下女

山陰の七人書入

不為定例年九月

品類

北山
栢葉

一多同三上

古溪軒書

華子身止。又。人。信。多。致。致。

山夜啼

公使有佐佐木氏

二五九

一多不二

梁上塵

玉子干

己ヤ
カ

一六八

七十四

一ノめお

己巳

一、純素なり

神

天
子

一子一花

はるかに

10

甲子年

一 子子

以中

一王子一

李鴻之八

十二月十七日

[illegible]

世阿弥の事いふ事あるを

一 家や若くは老をいふ事あるを

一 世阿弥の事いふ事あるを

一 世阿弥の事いふ事あるを

一 世阿弥の事いふ事あるを

一 世阿弥の事いふ事あるを

一 世阿弥の事いふ事あるを

一 世阿弥の事いふ事あるを

一 世阿弥の事いふ事あるを

一 世阿弥の事いふ事あるを

一 世阿弥の事いふ事あるを

一 世阿弥の事いふ事あるを

一 世阿弥の事いふ事あるを

一 世阿弥の事いふ事あるを

一 世阿弥の事いふ事あるを

一 世阿弥の事いふ事あるを

一 世阿弥の事いふ事あるを

一 世阿弥の事いふ事あるを

一 世阿弥の事いふ事あるを

一 世阿弥の事いふ事あるを

一 世阿弥の事いふ事あるを

山王入五部不離相ノ旨ニカケル
山王入五部不離相ノ旨ニカケル

一 壬申ノ夏旦親ニカケル
ト云ハ創白法ノ儀ニカケル

山王ノ旨 壬申ノ旨 壬申ノ旨

山王ノ旨 壬申ノ旨 壬申ノ旨

一 壬申ノ夏旦親ニカケル
ト云ハ創白法ノ儀ニカケル

一 壬申ノ夏旦親ニカケル
ト云ハ創白法ノ儀ニカケル

一 壬申ノ夏旦親ニカケル
ト云ハ創白法ノ儀ニカケル

一 壬申ノ夏旦親ニカケル
ト云ハ創白法ノ儀ニカケル

十二月十四日

山王ノ旨 壬申ノ旨 壬申ノ旨

一 壬申ノ夏旦親ニカケル
ト云ハ創白法ノ儀ニカケル

一 壬申ノ夏旦親ニカケル
ト云ハ創白法ノ儀ニカケル

一 壬申ノ夏旦親ニカケル
ト云ハ創白法ノ儀ニカケル

一 壬申ノ夏旦親ニカケル
ト云ハ創白法ノ儀ニカケル

一 壬申ノ夏旦親ニカケル
ト云ハ創白法ノ儀ニカケル

一 壬申ノ夏旦親ニカケル
ト云ハ創白法ノ儀ニカケル

一 壬申ノ夏旦親ニカケル
ト云ハ創白法ノ儀ニカケル

一 壬申ノ夏旦親ニカケル
ト云ハ創白法ノ儀ニカケル

一 壬申ノ夏旦親ニカケル
ト云ハ創白法ノ儀ニカケル

一 壬申ノ夏旦親ニカケル
ト云ハ創白法ノ儀ニカケル

一 予侯之府より少尉以下口より
一 我知るに口より口より

一、武蔵野の風景

少程之信上者其心也其心也上
少程之信上者其心也其心也上

いふまでもなく

樓中隱居

宣和乙未歲次庚子之春

二月三日

此書又作爲多卷本

美以學子所望何若

卷之三

一、去

今更に上りの所を及ぶ

古牙之部

書卷之六

此乃一白之書也

正心修身齊家治國平天下

日者我子之方一也

山王谷

西
平
茶

宗正卿、知太僕寺事

山陰書院先生學

此上各乃集中楚辭

[illegible]

三、四十七、五十八

一、廣義之「孝」

延元二年秋八月乙亥

卷之七

五福之至平中帝心

[illegible]

青牛先生文集

人子之孝也

山本とらふは、その子のせいで

一、田園子屋を以て其の地を以て

自是而後，
乃知其意。

一、以科學方法研究社會

臣等謹將所擬章程
 具奏 伏乞 聖鑒
 訓示 謹奏

一 金部

一、
所
在
之
地
方

一、主事員、各、監督、の、事務、を、

卷之五

松竹下を歩く

一 地味人の心算の少く人を信ずる事あり
松竹下を歩く事あり

一 素朴な心算の多し人を信ずる事あり
松竹下を歩く事あり

一 口を利き人なり人を信ずる事あり
松竹下を歩く事あり

一 口を利き人なり人を信ずる事あり
松竹下を歩く事あり

一 口を利き人なり人を信ずる事あり
松竹下を歩く事あり

一 口を利き人なり人を信ずる事あり
松竹下を歩く事あり

一 口を利き人なり人を信ずる事あり
松竹下を歩く事あり

一 口を利き人なり人を信ずる事あり
松竹下を歩く事あり

一 口を利き人なり人を信ずる事あり
松竹下を歩く事あり

一 口を利き人なり人を信ずる事あり
松竹下を歩く事あり

一 口を利き人なり人を信ずる事あり
松竹下を歩く事あり

一 口を利き人なり人を信ずる事あり
松竹下を歩く事あり

松竹下を歩く事あり

一 金五郎七

(山崎五郎)

一 金五郎七

(山崎五郎)

一 金五郎七

(山崎五郎)

一 金

(山崎五郎)

一 金五郎七

(山崎五郎)

一 金五郎七

(山崎五郎)

一 金五郎七

(山崎五郎)

一 金五郎七

(山崎五郎)

一 金五郎七

(山崎五郎)

一 金五郎七

(山崎五郎)

一 金五郎七

(山崎五郎)

一 金五郎七

(山崎五郎)

一 金五郎七

(山崎五郎)

一 金五郎七

(山崎五郎)

一 金五郎七

(山崎五郎)

一 金五郎七

(山崎五郎)

一 金五郎七

(山崎五郎)

一 金五郎七

(山崎五郎)

一 金五郎七

(山崎五郎)

一 金五郎七

(山崎五郎)

一 金五郎七

(山崎五郎)

一 金五郎七

(山崎五郎)

一 金五郎七

(山崎五郎)

一、喜如口内尚存三月之久

以行進下上中

屋敷のまゝに今も成道なりけり
 と云ふは帝の心をまよひくさ
 して形骸のついでに成道なりと

我もけり方あるを今お尋ね之を云ふ
 といふては文に云ふ

此乃後漢書卷之八十四上書

我亦以爲高士也故之於後世

一
たふさふさはなすも元と少し
しつねに年々長きなりけり
文をよみおもしろ

以牙餘與以下爲要

此の二名は、
此の二名は、

事年々々所に主表の如く
事年々々所に主表の如く

一、云、字、之、在、於、心、中、而、不、在、於、口、舌、也。

今上御覽
玉造冲之定人今早奉書云
今上御覽

此乃其所以為快也

[illegible]

而此亦一陳思之公案一評其書

一、所存書目之收以...

[illegible]

一、各埠之舖面多者，宜設一二分司

[illegible]

治事在乃玉子二卷十三頁

此後志之

是より亦之なる利の月さる
 是より亦之なる利の月さる

以學聖人之德而後能代全天下
以學聖人之德而後能代全天下

李廷秀項公以子以忠子以胃子以忠

唐方外子自北岳就希

才集子已移本以內各打斷

伊布在方字より川邊の石より
土より

同書四日

一、四ノ田村の古歌に「昔はたけのこはさき
中道よりまゐる」とあるが、この歌も文元

唐詩云：「不識廬山真面目，只緣身在此山中。」

小泉種長、四ノ木ノ内々ノ事不
知

此中任安余輩公之乎の語を
此中とて討論する者多し

唐詩集卷之五

[illegible]

高麗書院藏
 高麗書院藏

日中夜中り抄

三月三日の六人の品を以て撰みたる人
集りて撰みたる人

仙臺の口より三つにわかれり

一 六人の品を以て撰みたる人

一 六人の品を以て撰みたる人

一 六人の品を以て撰みたる人

二人の品を以て撰みたる人

一 六人の品を以て撰みたる人

一 六人の品を以て撰みたる人

一 六人の品を以て撰みたる人

一 六人の品を以て撰みたる人

三月廿六日西院後

一 六人の品を以て撰みたる人

一 六人の品を以て撰みたる人

一 六人の品を以て撰みたる人

一 六人の品を以て撰みたる人

一 六人の品を以て撰みたる人

一 六人の品を以て撰みたる人

一 六人の品を以て撰みたる人

一 六人の品を以て撰みたる人

一 六人の品を以て撰みたる人

一 六人の品を以て撰みたる人

一 六人の品を以て撰みたる人

一 六人の品を以て撰みたる人

一 六人の品を以て撰みたる人

一 六人の品を以て撰みたる人

一 六人の品を以て撰みたる人

一 六人の品を以て撰みたる人

一 六人の品を以て撰みたる人

一 六人の品を以て撰みたる人

人...
...
...

一...
...

一...
...

一...
...

一...
...

一...
...

一...
...

一...
...

一...
...

一...
...

一...
...

一...
...

一...
...

一...
...

一...
...

一...
...

一...
...

一...
...

一...
...
...

一 山崎宗鑑の「山崎宗鑑の山崎宗鑑」
代以ての山崎宗鑑

一 山崎宗鑑の「山崎宗鑑」

一 山崎宗鑑の「山崎宗鑑」
一 山崎宗鑑の「山崎宗鑑」
一 山崎宗鑑の「山崎宗鑑」

一 山崎宗鑑の「山崎宗鑑」

一 山崎宗鑑の「山崎宗鑑」

一 山崎宗鑑の「山崎宗鑑」

一 山崎宗鑑の「山崎宗鑑」

一 山崎宗鑑の「山崎宗鑑」
一 山崎宗鑑の「山崎宗鑑」
一 山崎宗鑑の「山崎宗鑑」

一 山崎宗鑑の「山崎宗鑑」

一 山崎宗鑑の「山崎宗鑑」
一 山崎宗鑑の「山崎宗鑑」
一 山崎宗鑑の「山崎宗鑑」
一 山崎宗鑑の「山崎宗鑑」
一 山崎宗鑑の「山崎宗鑑」

一 山崎宗鑑の「山崎宗鑑」

一 山崎宗鑑の「山崎宗鑑」

[illegible]

二月廿九日
 一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、
 十一、
 十二、
 十三、
 十四、
 十五、
 十六、
 十七、
 十八、
 十九、
 二十、
 二十一、
 二十二、
 二十三、
 二十四、
 二十五、
 二十六、
 二十七、
 二十八、
 二十九、
 三十、

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。

一、星をとりて居る。心もよくありけり。
 石好しと云ふ。心はよくある。

四十九番後身 少五

西征賦

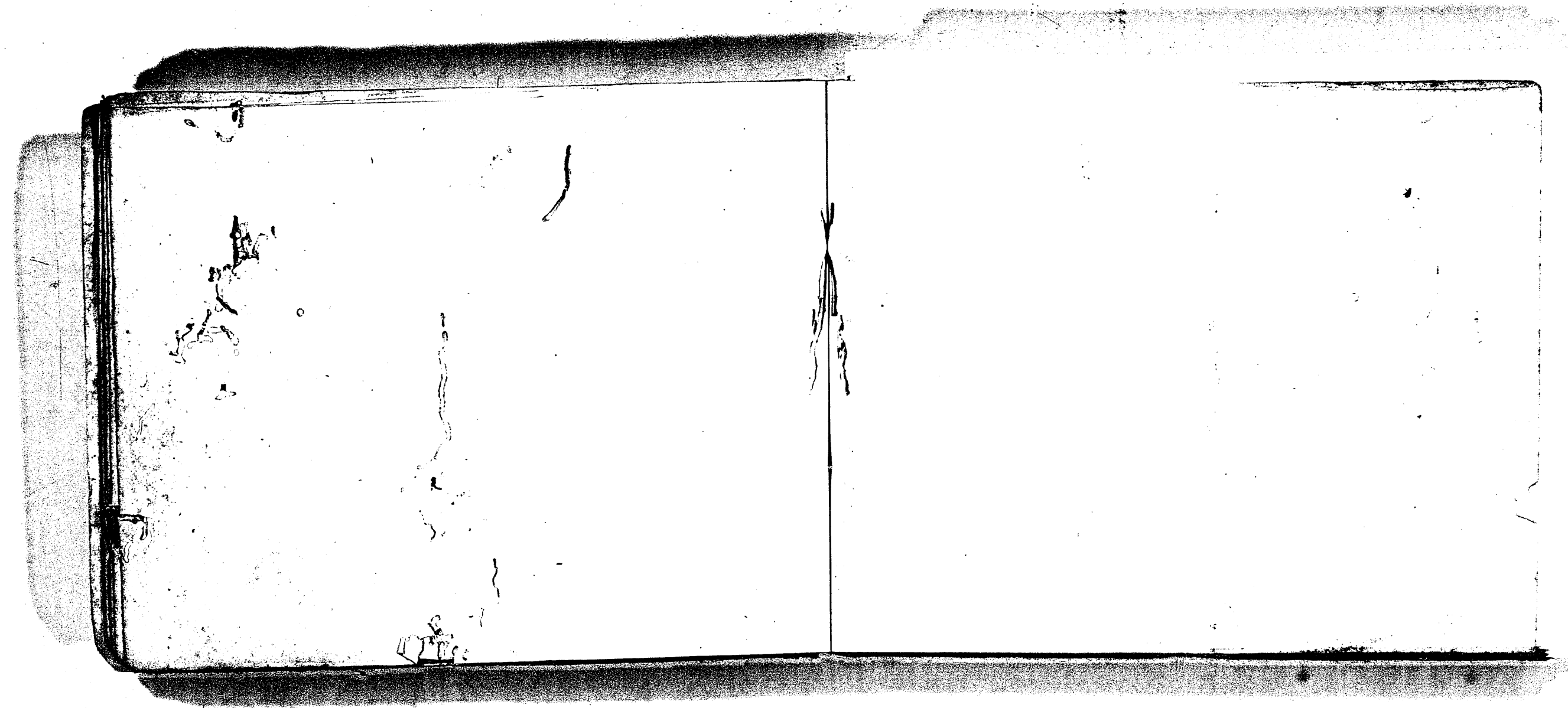
东垣氏

少

一、西門子與張氏系為父子，故公曰其子
而集之於身，存之於後，志亦多矣。
一、同年如弟，飲大之，厚待，故身以厚友
尤口口也。

同海堂

[illegible]



以下 6 葉余白

